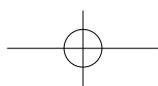
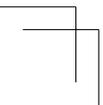
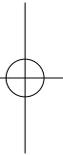
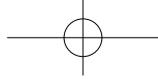
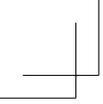


平安京左京二条二坊十町跡・高陽院跡・
二条城北遺跡発掘調査報告書

2024年

特定非営利活動法人平安京調査会



平安京左京二条二坊十町跡・高陽院跡・
二条城北遺跡発掘調査報告書

2024年

特定非営利活動法人平安京調査会

例 言

- 1 本書は京都市中京区竹屋町通堀川東入ル西竹屋町 505番 1、505番 2、507番、509番地で実施した平安京左京二条二坊十町跡・高陽院跡・二条城北遺跡発掘調査報告書である。(京都市番号 23H370)
- 2 調査は共同住宅新築工事に伴い実施した。
- 3 現地調査は株式会社ダイマルヤより、特定非営利活動法人平安京調査会(以下、「平安京調査会」という)に委託され、吉崎 伸が担当した。
- 4 調査期間は令和 6 年 5 月 19日から 6 月 26日である。
- 5 面積は 164㎡である。
- 6 本文、図中で使用した調査位置図は京都市発行の都市計画基本図(縮尺 1:2,500)「聚楽廻」を調整して使用した。
- 7 本文・図中の方位・座標は世界測地系による。標高は T.P.(東京湾平均海面高度)である。
- 8 土層名および出土遺物の色調は、農林水産省水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』に準じた。
- 9 本書の執筆・編集は吉崎 伸が行った。
- 10 現地の記録写真撮影は吉崎 伸が行い、出土遺物の撮影は九鬼みづほが行った。
- 11 調査にかかる資料は京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課が保管している。
- 12 発掘調査および整理作業の参加者は以下のとおりである。

〔発掘調査〕吉崎 伸(平安京調査会)

作業員 岸波敏明・川名貴樹・櫻井文隆・小野寺 健・北尾拓真・友重文彰
須藤雅彦

〔整理作業〕株式会社コンピュータ・システム、平尾政幸、岸波敏明

- 13 出土遺物の年代観は、平尾政幸「土師器再考」『洛史 研究紀要 第 12 号』公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2019年による。
- 14 本調査の検証審査員は同志社女子大学、山田邦和教授である。
- 15 発掘調査、整理作業において、下記の方からご指示ご指導をいただいた。記して感謝いたします。

(敬称略)

狭川真一(大阪大谷大学)、鈴木久男(京都産業大学客員教授)、南 孝雄・柏田有香(公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所)

目 次

第 I 章	調査の経緯	1
1	調査に至る経緯	1
2	調査経過	2
第 II 章	遺跡	4
1	歴史的環境	4
2	既往調査	5
第 III 章	遺構	8
1	基本層序	8
2	第 3 面の遺構	13
3	第 2 面の遺構	15
4	第 1 面の遺構	16
第 IV 章	遺物	17
1	土器類	17
2	土製品	20
3	瓦類	20
4	銭貨	21
5	礎石	21
第 V 章	まとめ	23

図 版 目 次

図版 1	遺構 1. 第 3 面オルソ画像 (俯瞰)
図版 2	遺構 1. 第 2 面オルソ画像 (俯瞰)
図版 3	遺構 1. 第 1 面オルソ画像 (俯瞰)
図版 4	遺構 1. 大炊御門大路北築地関連遺構 (西から) 2. 大炊御門大路北築地関連遺構 (南から)

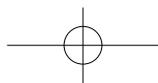
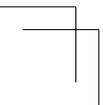
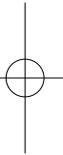
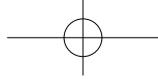
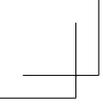
- 図版 5 遺構 1. 大炊御門大路北築地〔築地 301〕(西から)
2. 大炊御門大路北築地断割断面〔築地 301〕(西から)
- 図版 6 遺構 1. 池 307(南から)
2. 池 307(西から)
- 図版 7 遺構 1. 堤 210〔礎石を用いた核〕(東から)
2. 土坑 211完掘状況(北から)
- 図版 8 遺構 1. 溝 201(西から)
2. 溝 201断面(東から)
- 図版 9 遺構 1. 調査区北部土坑群(南から)
2. 土坑 32(東から)
3. 土坑 21(南から)
4. 土坑 22(東から)
5. 土坑 23(北から)
- 図版 10 遺構 1. 1区第1面全景(南東から)
2. 1区第1面南部(北東から)
- 図版 11 遺物 (土器類)
1. 溝 304出土土器
2. 溝 304出土土馬
3. 溝 302出土土器
4. 第2層出土緑釉水滴
5. 第2層出土土器
- 図版 12 遺物 (土器類)
1. 溝 201出土土器
2. 第1層出土土器
- 図版 13 遺物 (土器類)
- 図版 14 遺物 (瓦類)
- 図版 15 遺物 (銭貨・石製品)
1. 銭貨
2. 礎石 1
3. 礎石 2

挿 図 目 次

図 1	調査位置図(1:2,000)	1
図 2	調査区配置図(1:400)	2
図 3	調査経過写真	3
図 4	東壁・南壁・西壁断面図(1:100)	9
図 5	第3面平面図(1:100)	10
図 6	第2面平面図(1:100)	11
図 7	第1面平面図(1:100)	12
図 8	大炊御門大路関連遺構実測図(1:100)	13
図 9	池 307実測図(1:100)	14
図 10	溝 201実測図(1:80)	15
図 11	ピット 1 実測図(1:20)	15
図 12	出土土器実測図(1:4)	18
図 13	出土瓦拓影・実測図(1:4)	21
図 14	礎石実測図(1:20)	22
図 15	近隣調査遺構配置図(1:200)	24
図 16	寛永後萬治前洛中絵図	25

表 目 次

表 1	高陽院関連略年表 1	6
表 1	高陽院関連略年表 2	7
表 2	既往調査概要表	7
表 3	遺構概要表	8
表 4	遺物概要表	17
表 5	土器計測表	19
表 6	錢貨表	22



第 I 章 調査の経緯

1. 調査に至る経緯 (図 1)

調査地は京都市中京区竹屋町通堀川東入ル西竹屋町 505 番 1、505 番 2、507 番、509 番地に所在し、平安京左京二条二坊十町、高陽院跡、二条城北遺跡に該当している。ここで共同住宅新築工事計画がされたため、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課(以下「文化財保護課」という)が試掘調査を行った。この結果、土坑や遺物包含層などが検出されたため、発掘調査の指導がなされ、委託を受けた平安京調査会が調査を実施した。

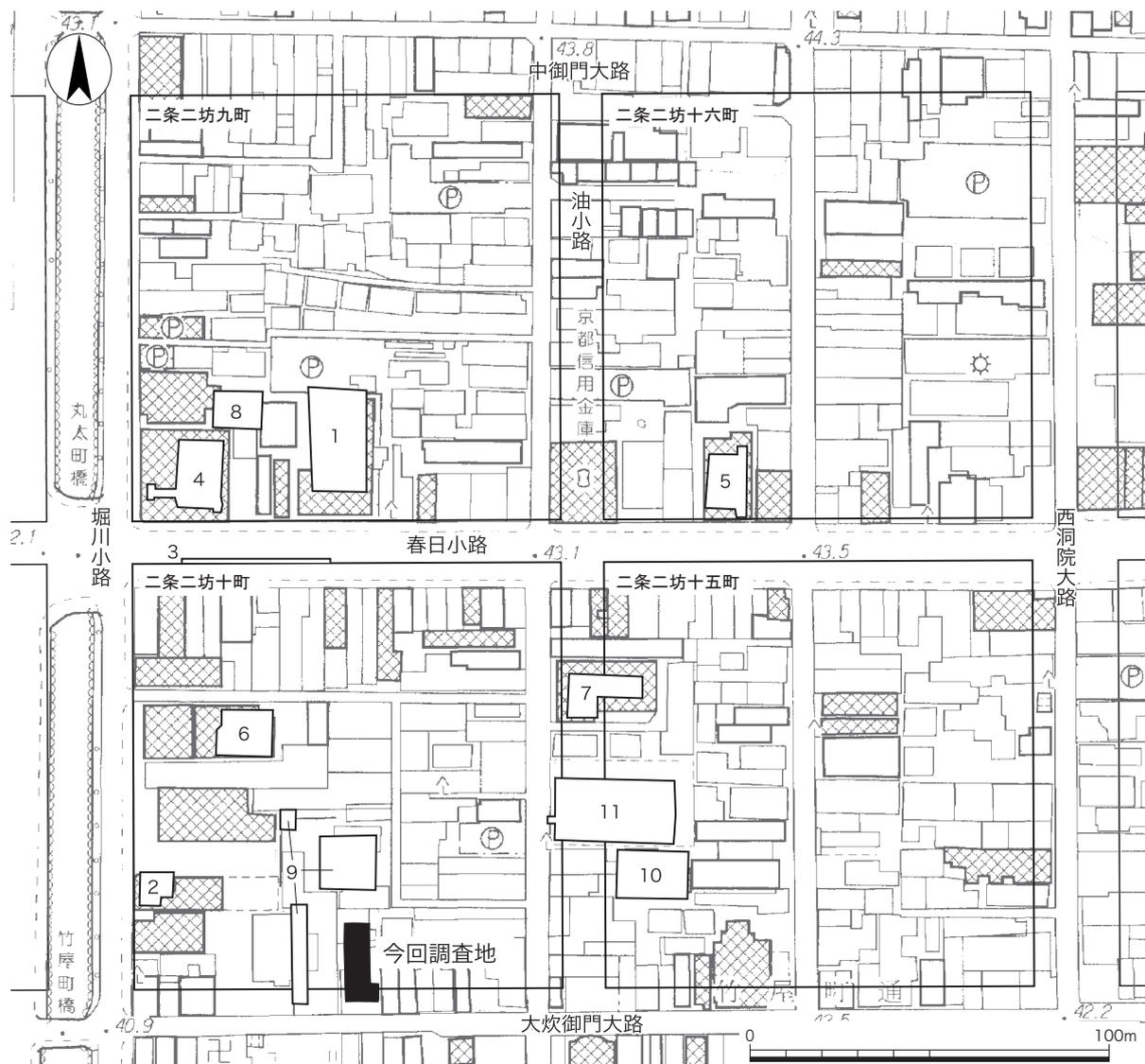


図 1 調査位置図(1 : 2,000)

2. 調査経過 (図2・図3)

調査は2024年5月19日より準備工および調査区の設定から開始した。敷地の西寄りに東西7m、南北22m、その南東部に東西2m、南北5mの拡張区を設けた面積164㎡の調査区を設定した。文化財保護課の試掘結果により平安時代から近世初頭に及ぶ3面の調査を計画した。5月20日より重機を搬入し、まず第1面までの重機掘削を開始した。ところが重機掘削を進めるうちに排土が場内で処理できないことが明らかとなった。そこで、調査区南部から北へ14m地点までを先行して調査を行い1区とし、その調査を終えた後、反転して2区の調査を行うことに計画を変更した。

1区第1面の調査では近世以降の攪乱と廃棄土坑が多く面積を占め、江戸時代のピットを少数検出したにとどまった。その後近世の遺物包含層(第1層)を掘り下げ、第2面の調査を実施した。ここでは、鎌倉時代の大炊御門大路の北側溝と推定される溝、中世の土坑を検出した。その後、中世の遺物包含層(第2層)の掘り下げを行ったが、この途中で調査区の南西部で花崗岩製の大型礎石を核とした堤状の遺構を検出した。これは、第2層を埋め戻す際の南限の堤であることが判明した。第2層を除去し、第3面の調査では調査区の南側で平安時代の大炊御門大路北築地が高まりとなって残存しており、大炊御門大路の北側溝や路面を2時期にわたって検出し、十町側の内溝も確認できた。

6月14日には1区の調査を終え、6月15日から反転して2区の調査を開始した。2区は1区で見られた第1層がごく薄く、小範囲にとどまっていたことから、第2面からの調査となった。ここでは中世から江戸時代前期の土坑群を検出した。この中には国産の施釉陶器、いわゆる茶陶を多く出土しているものがある。2面の調査を終え、第2層の掘り下げを開始すると地山面が北下がりとなり、第3面は池状を呈することが明らかとなった。これは周辺の調査で検出されている高陽院の園池の一部と推定された。これらの記録作業を行い6月26日には埋め戻し、機材を撤収してすべての調査を終了した。この間、調査中は随時、文化財保護課の検査・指導を受け、検証審査員である同志社女子大学の山田邦和教授の検査を受けた。また、6月7日には周辺住民に対して現場公開を行い、約50名の参加を得た。

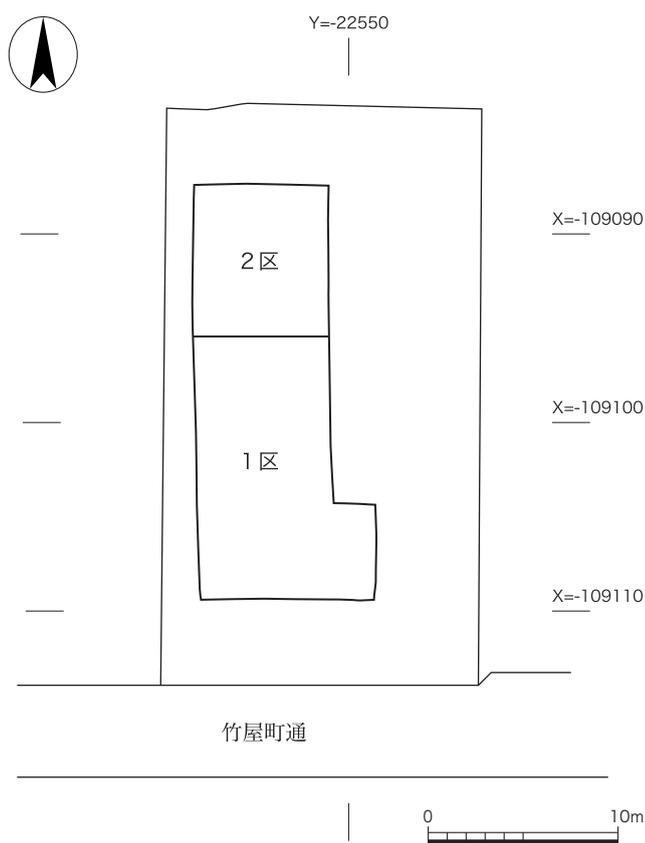


図2 調査区配置図(1:400)



1. 調査区設定



2. 重機掘削



3. 遺構検出作業



4. 遺構掘削作業



5. ドローンによる3D計測



6. 文化財保護課の検査



7. 現場公開の状況



8. 検証審査委員の審査

図3 調査経過写真

第Ⅱ章 遺跡

1. 歴史的環境（表1）

調査地は平安京左京二条二坊十町跡、高陽院跡、二条城北遺跡に比定されている。

二条城北遺跡 二条城北遺跡は二条城の北東一帯に広がる縄文時代から弥生時代の遺跡で東西約800m、南北約500mの規模と推定され、これまでに縄文時代から弥生時代の流路や弥生時代の土坑やピットなどが確認されている。地形に沿って北東から南西方向に流れる流路沿いに集落が存在していると考えられるが、いまだその実態は明らかではない。ただしこの流路跡が、後述する高陽院の池の水源の一部として用いられた可能性は高い。

高陽院跡 本来高陽院は平安京左京二条二坊九町に存在した、桓武天皇の第七子である賀陽親王の邸宅（賀陽院）であった。その後平安時代中期の所有者は明らかとなっていない。

平安時代中期末（11世紀）、藤原頼通がこの地を中心に二町四方（左京二条二坊九・十・十五・十六町）の巨大な邸宅を造営する（高陽院1次）。父道長を継いで関白となった寛仁三年（1019）頃から造営をはじめ、治安元年（1021）には落慶した。その様子を『小右記』では「高大壯麗、比類すべき無し」と伝え、庭には5、6尺の立石や樹木が植えられていたとも記されている（註1）。また、万寿元年（1024）に後一条天皇の行幸を仰ぎ競馬が催され、この時の様子が『駒競行幸絵巻』に描かれている（註2）。

その後高陽院は、長暦三年（1039）、天喜二年（1054）、承暦四年（1080）、天永三年（1112）と度重なる火災で焼失したが、その都度再建された。長暦三年後の再建（高陽院2次）では、『作庭記』に「高陽院修造の時も・・・中略・・・宇治殿みづから御沙汰ありき」（註3）と頼通が作庭にかかわったことが伝えられている。

天喜二年火災後の再建（高陽院3次）では後冷泉天皇、以降5代の天皇の里内裏となり、「累代の皇居」とも呼ばれた。（高陽院4・5次）また、鳥羽天皇皇后の藤原素子はここで死去し、「高陽院」の院号を与えられている。

鎌倉時代には後鳥羽上皇が院政の拠点となる院の御所として、元久二年（1205）に整備し、遷御している（高陽院6次）。この時の造営では二町四方の敷地から東側の二町（十五・十六町）へと規模を縮小（註4）し、高陽院西部の池は埋め戻され、油小路が再設された（註5）と考えられている。その後高陽院は承元3年（1209）と建保六年（1218）に2回の小改修（註6）が行われている。承久の乱の敗北により、後鳥羽上皇は配流となり、後高倉上皇が高陽院に入ったが、貞応二年（1223）の放火で焼亡（註7）、その後再建されることはなかった。

註1 「（治安元年九月）二十九日の条」『小右記』

註2 『栄花物語』巻二十三「こまくらべの行幸」を絵巻物にしたもので、鎌倉時代の作。

- 註3 「立石口伝の条」『作庭記』
- 註4 「(天久二年)十二月二日」、今日高陽院御移徙也、(中略)所々大略歴覽、南北二町、東西一町、屋敷六十余宇」『三長紀』
- 註5 「(承久二年四月)十六日、此日東宮始聞魚味、(中略)今曉行啓院御所、高陽院、被遂行也、(中略)御路西洞院北行、二条西行、油小路北行、(中略)自高陽院西面四足門入御」『玉葉』
- 註6 「(承元三年十二月)十日、有高陽院御移徙也、(中略)今度非新造、引出寢殿於南、東対屋加庇、少々被造加舎屋也、十六日、高陽院殿屋百宇云々、」『三長紀』
「(健保六年十一月)廿一日 為高陽院修理鎮宅被修之、」『門葉記』
- 註7 「(貞応二年正月)十二日、高陽院有放火事、数字殿社一時焼亡、放火之有其聞、法皇御行一条相国寺、」『百練抄』

2. 既往調査 (図1・表2)

高陽院跡ではこれまでに発掘、試掘合わせて11回の調査が行われており、今回は高陽院跡12次の調査となる(註1)。ここでは高陽院跡の調査歴を町ごとにまとめて報告する。

九町域では町の南西部で4件の調査(1・3・4・8次)が行われている。それぞれの調査で高陽院の園池の北西部を検出しており、汀に数時期の改修があったことが確認されている。高陽院に伴う礎石建物や白砂の敷かれた庭の一部が確認されている(8次)。また、高陽院に先行する平安時代中期の池跡(8次)や平安時代前期、賀陽親王の邸宅にかかわるとみられる池跡(4次)も確認されている。

十町域では町の南西部を中心に3件の調査(2・6・9次)が行われている。ここでは九町域から続く広大な園池の南西部が検出され、池尻や排水路(2次)も確認されている。また、十町の南限である大炊御門大路の北築地や側溝、路面など(9次)が検出されている。

十五町域では町の西寄りでは3件の調査(7・10・11次)が行われている。ここでも高陽院の園池が広がっていることが確認されており、中島や池を埋め戻した後の建物(7次)を検出している。

十六町域では1件の調査(5次)が行われている。ここでも高陽院の園池を検出しているが、ほかの町域で検出した池より水位が高いことが明らかとなり、別の園池の存在が明らかとなっている。

以上、これまでの調査によって高陽院には南西部一帯に大規模な園池が広がり、北東部には別の園池が存在することが明らかとなった。建物の状況は明らかではないが北西部でその一部が確認されており、北部に建物の存在が想定されている。

註1 2019年、株式会社文化財サービス発行の『平安京左京二条二坊十・十五町(高陽院)跡発掘調査報告書』において高陽院跡の調査歴がまとめられており、今回の報告ではその調査次数を踏襲する。

表1 高陽院関連略年表1

高陽院 次数	和暦	西暦	事象	出典	
1次	寛仁	3	1019	藤原頼通関白となる。このころ高陽院の運営を始める？	
	治安	1	1021	藤原頼通の高陽院が中御門南、堀川東に完成する。	小右記
	万寿	1	1024	高陽院にて駒競。御一条天皇行幸、太皇太后彰子、東宮行啓	栄花物語
	長元	8	1035	賀陽院(高陽院)水閣歌合	群書類従
	長暦	1	1037	高陽院文殿が焼失する	行親記
3		1039	延暦寺僧が高陽院に放火する	扶桑略記	
2次		4	1040	高陽院再建	
	長久	4	1043	後朱雀天皇還幸(里内裏)	
	寛徳	2	1045	後冷泉天皇即位	扶桑略記
	永承	7	1052	藤原頼通 宇治殿を寺院に改める(平等院)	扶桑略記
	天喜	2	1054	高陽院内裏が焼失する	扶桑略記
3次	康平	3	1060	高陽院上棟される 後冷泉天皇 三条第より新造の高陽院へ還幸	園太歴
		5	1062	後冷泉天皇 競馬・騎射を観覧 後三条天皇即位	
	延久	1	1069	後三条天皇 大宮院より還幸	
		4	1072	白河天皇即位	百練抄
	承保	1	1074	藤原頼通没	
		2	1075	競馬 白河天皇行幸 法勝寺の運営を始める	水左記
	承暦	3	1079	春日小路辺りから出火して高陽院(大炊御門北・堀川東)等 三十六町が焼失する	為房卿記
		4	1080	皇居高陽院が焼失する	扶桑略記
応徳	3	1086	堀河天皇即位 白河上皇の院政始まる。藤原師実摂政 鳥羽 離宮の造営始まる	扶桑略記 後二条師通 記	
4次	寛治	3	1089	藤原師実が高陽院を新造する	後二条師通 記
		6	1092	高陽院に虹市が立つ 藤原師実が新造高陽院に移る	百練抄 中右記
	承德	1	1097	大雨により高陽院、左近衛府、円乗寺等が倒れる	中右記
	康和	2	1100	堀河天皇 高陽院に還幸	
	嘉承	2	1107	鳥羽天皇即位	殿暦
	天永	2	1111	鳥羽天皇 土御門より高陽院へ還幸	
3		1112	高陽院南池辺に内膳屋を造る 皇居高陽院が焼失する	中右記 殿暦	
5次	久寿	2	1156	鳥羽天皇皇后 高陽院(藤原素子) 高陽院で崩御	
	寿永	2	1183	後鳥羽天皇即位	玉葉
	建久	9	1198	土御門天皇即位 後鳥羽上皇	三長記
6次	元久	2	1205	高陽院(中御門南・西洞院西) 造作がなり、後鳥羽上皇が京 極殿より移る 高陽院南北二町、東西一町、屋敷六十余宇	明月記 三長記
		1	1207	後鳥羽上皇が高陽院殿より白河新御堂御所に移る	明月記
	承元	3	1209	高陽院大改修	
		4	1210	下院馬場殿焼亡 順徳天皇即位	百練抄
	建暦	2	1212	後鳥羽天皇 御所高陽院	
	建保	1	1213	順徳天皇 高陽院へ行幸	
		2	1214	二条猪熊に出火し、高陽院に類焼する	百練抄
6		1218	高陽院修造		

表1 高陽院関連略年表2

高陽院 次数	和暦	西暦	事 象	出典	
6次	承久	2	1220	皇太子が上皇御所高陽院で袴着	百練抄 吾妻鑑
		3	1221	後鳥羽上皇が鎌倉幕府追討の兵を集め、北条義時追討の宣旨を下す(承久の変) 後鳥羽上皇・土御門上皇・順徳天皇配流 後堀河天皇即位 後高倉法皇は高陽院に移る	
	貞応	1	1222	後高倉法皇が下院を用いる	百練抄
		2	1223	御所高陽院が炎上して後高倉法皇西園寺公経第に移る その後再建されず	

表2 既往調査概要表

高陽院 調査次数	調査位置	調査の 種類	調査成果概要	掲載文献
1	左京二条二坊九町	発掘	高陽院の4時期にわたる池跡とそれに伴う州浜・景石・柱列を検出。各時期の間にも小改修が行われていたことを確認。	埋文研『平安京跡発掘調査概要』昭和56年度
2	左京二条二坊十町	立会	高陽院の池跡及び排水路と思われるものを検出。弥生時代の流路を検出。	埋文研『京都市内遺跡試掘・立会調査』昭和56年度
3	左京二条二坊十町	立会	高陽院の池跡を検出。縄文時代から弥生時代の流路確認	埋文研『昭和58年度京都市埋蔵文化財調査概要』
4	左京二条二坊九町	発掘	高陽院の前身である賀陽親王期(平安時代前期)の園池を検出。高陽院に伴う池はここに及ばず。	埋文研『昭和63年度京都市埋蔵文化財調査概要』
5	左京二条二坊十六町	発掘	高陽院の池跡を検出するも1次調査で検出した池跡よりも水位が高く別の池であることを確認。	埋文研『平安京跡発掘調査概要』昭和63年度
6	左京二条二坊十町	発掘	高陽院の池跡西岸を検出。汀に造作なし。弥生時代の流路検出。	埋文研『平安京跡発掘調査概要』平成元年度
7	左京二条二坊十五町	発掘	高陽院の池跡、中島、景石を検出。池を埋めた地業の上に建物遺構を検出。	埋文研『平成元年度京都市埋蔵文化財調査概要』
8	左京二条二坊九町	発掘	平安時代中期(10世紀)の池跡を検出。高陽院の遺構を3時期(A~C)にわたって検出。A期では池跡、B・C期では建物遺跡を検出。	埋文研『平成9年度京都市埋蔵文化財調査概要』
9	左京二条二坊十町	発掘	平安時代前期の大炊御門大路路面・北側溝・北築地・内溝を検出。高陽院の池南岸部を4時期にわたり検出。縄文時代晩期から弥生時代の流路を検出。	埋文研『平安京左京二条二坊十町(高陽院)跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2005-7
10	左京二条二坊十五町	立会	高陽院の池の南岸と州浜を検出。	文化市民局『京都市内遺跡詳細分布調査報告』平成23年度
11	左京二条二坊十五町	発掘	高陽院の池跡を検出。埋め戻されてからの油小路路面を検出。	文化財サービス『平安京左京二条二坊十町(高陽院)跡』
12	左京二条二坊十町		平安時代前期・中期の大炊御門大路路面・北側溝・北築地・内溝を検出。高陽院の池南岸部を検出。	本報告書

※掲載文献の略称：埋文研(財団法人京都市埋蔵文化財研究所(平成23年度以降は公益財団法人)、文化市民局(京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課)文化財サービス(株式会社文化財サービス)

第Ⅲ章 遺構

1. 基本層序（図4）

調査前の当地は建物が撤去された更地で、北側が一段高く（標高 42.1 m）、南側が低い（標高 41.8m）状態であった。調査区の基本層序は、西壁を基準にすると地表下 0.8 mまでが近・現代の整地層及び攪乱層、その下に近世の整地層である暗褐色砂泥（10YR3/3：第1層）が0.2 m堆積している。その下に中世の整地層である黒褐色砂泥（7.5YR3/2：第2層）が0.25 m、さらにその下に径 0.1 m前後の礫を多く含む黒褐色砂泥（7.5YR3/2：第2層下層）が堆積する。この第2層下層は後述する土坑 211 を埋め戻した層である。その下は径 0.1 m前後の礫を多く含む褐色粘質土（10YR4/4）の地山である。一方、調査区の北側は第1層が薄く部分的に堆積し、近現代の整地層の下はすぐに第2層となる。さらにその下は池の埋土であるにぶい黄褐色粘質土（10YR4/3）に暗褐色砂泥（7.5YR3/3）のブロック混じる層が北下がり堆積し、厚いところでは 0.4 mある。

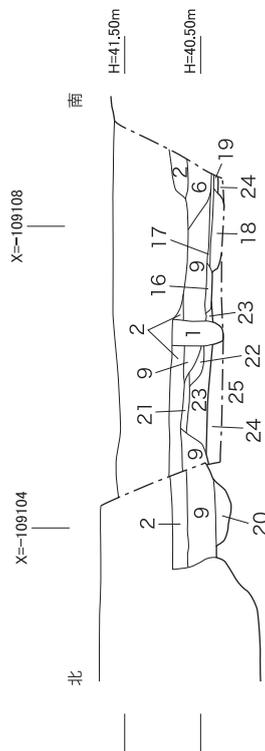
なお、調査区の地山は基本的に上から黄褐色粘質土（10YR5/6）、黒褐色粘質土（10YR3/1）が堆積している。これらはいわゆる聚楽、黒聚楽と呼ばれる良質な粘質土で、建築材料や陶土として利用されることから採掘されることが多く、西壁断面の底部の礫混じりの地山はこれらが採掘された下に堆積する土層である。

調査では近世の整地層（第1層）の上面を第1面として調査し、中世の整地層（第2層）の上面を第2面、第2層を掘り下げた地山面を第3面として調査した。

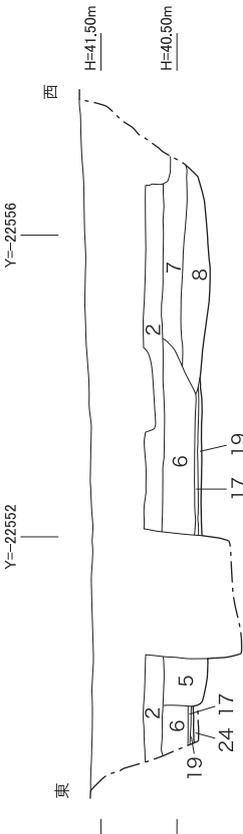
表3 遺構概要表

時代	遺構	備考
平安時代	築地301、路面303・305、溝302・304・306、池307	築地や溝は大炊御門大路関連遺構
鎌倉時代～室町時代	溝201、土坑202・203・210、堤211	溝201は鎌倉時代の大炊御門大路北側溝
江戸時代	土坑22・23・32、ピット1	

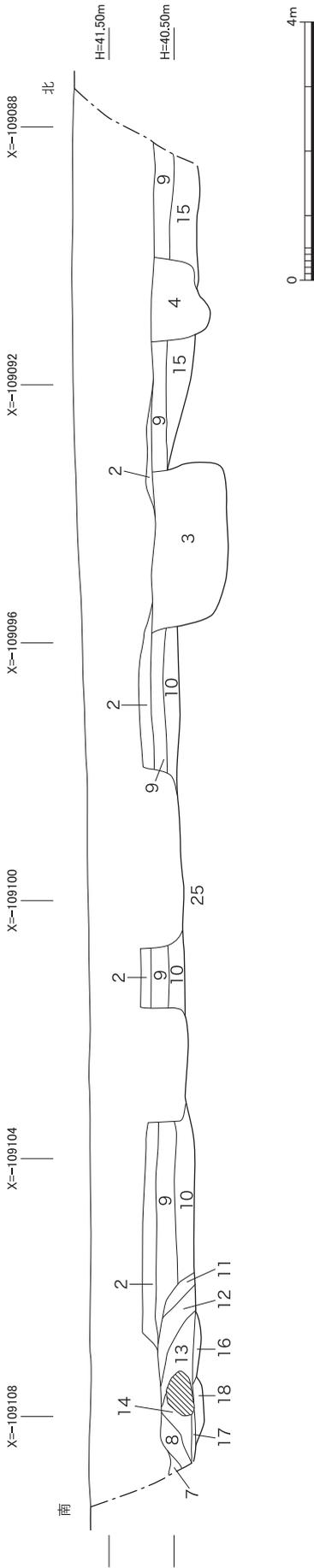
東壁



南壁



西壁



- 1 10YR3/4 暗褐色砂泥 やや粘質(ピット3)
- 2 10YR3/3 暗褐色砂泥 (第1層)
- 3 10YR4/1 褐灰色砂泥 炭化物混(土坑32)
- 4 7.5YR4/1 褐灰色砂泥 土師器片多く含む(土坑22)
- 5 10YR4/1 褐灰色砂泥(土坑4)
- 6 7.5YR4/2 褐灰色砂泥 土師器片多く含む (溝201)
- 7 7.5YR4/2 褐灰色砂泥 φ5~10cmの礫多く含む
- 8 10YR4/2 褐灰色砂泥 土師器片多く含む
- 9 7.5YR3/2 黒褐色砂泥 (第2層)
- 10 7.5YR3/2 黒褐色砂泥 φ10cm前後の礫多く含む(第2層下層)
- 11 10YR3/4 暗褐色砂泥 土師器片多く含む
- 12 10YR3/3 暗褐色砂泥 φ5~8cm代の礫多く含む
- 13 10YR3/3 暗褐色砂泥 土師器片多く含む (堤210)
- 14 10YR4/2 褐灰色砂泥
- 15 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 + 7.5YR3/3 暗褐色粘質土ブロック混(池307)
- 16 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 土師器片含む(溝302)
- 17 10YR3/2 黒褐色砂泥 φ5cm代の礫多く含む、固く締まる(路面303)
- 18 10YR4/4 褐色砂質土 土師器片多く含む(溝304)
- 19 10YR3/4 暗褐色砂泥 φ5~8cm代の礫多く含む、固く締まる(路面305)
- 20 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥(溝306)
- 21 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土
- 22 10YR6/4 にぶい黄褐色粘質土 土師器片含む (築地301)
- 23 10YR5/6 黄褐色粘質土(地山)
- 24 10YR3/1 黒褐色粘質土
- 25 10YR4/4 褐色粘質土 φ10cm前後の礫多く含む (地山)

図4 東壁・南壁・西壁断面図(1:100)

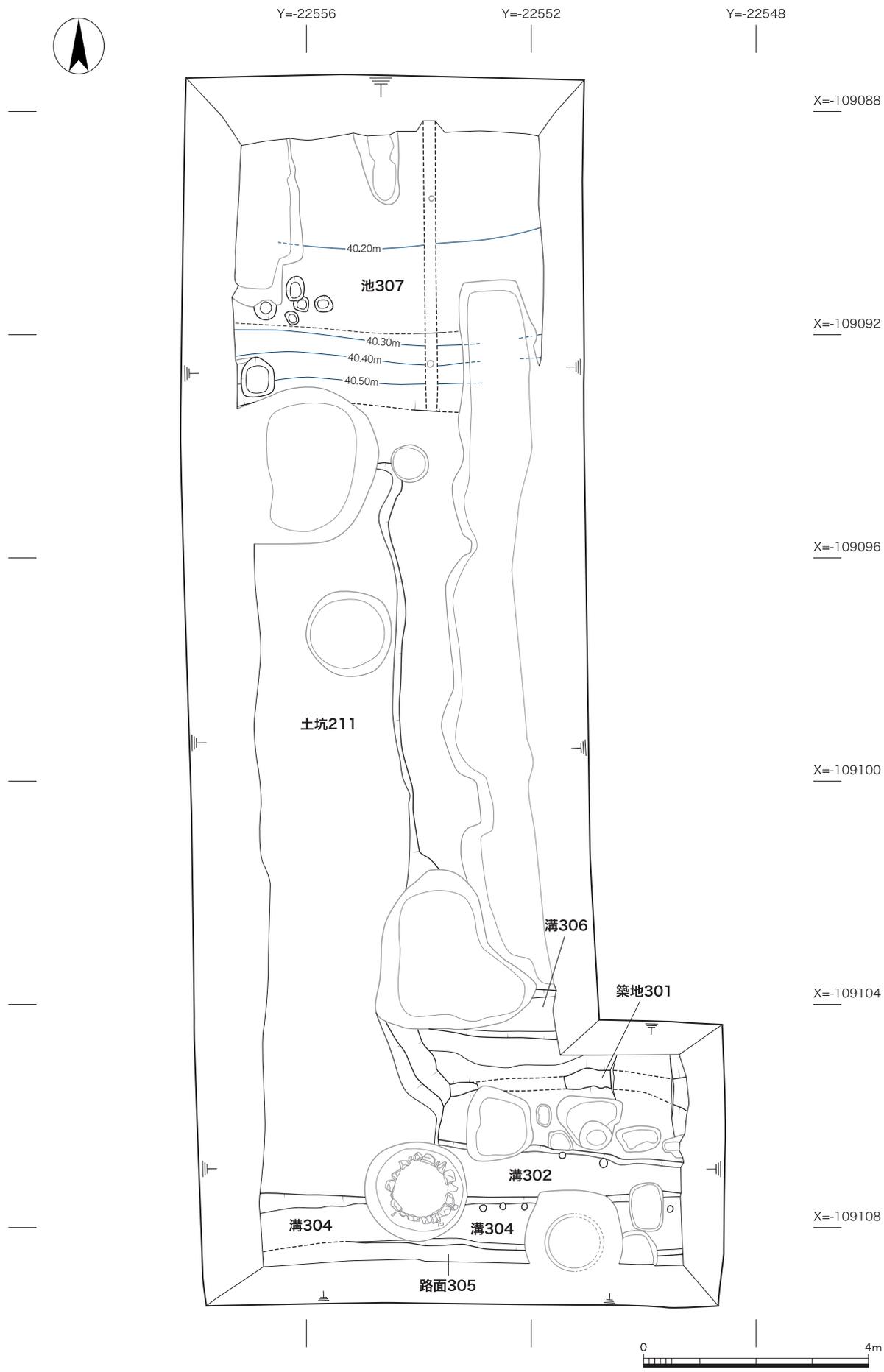


图5 第3面平面图(1:100)

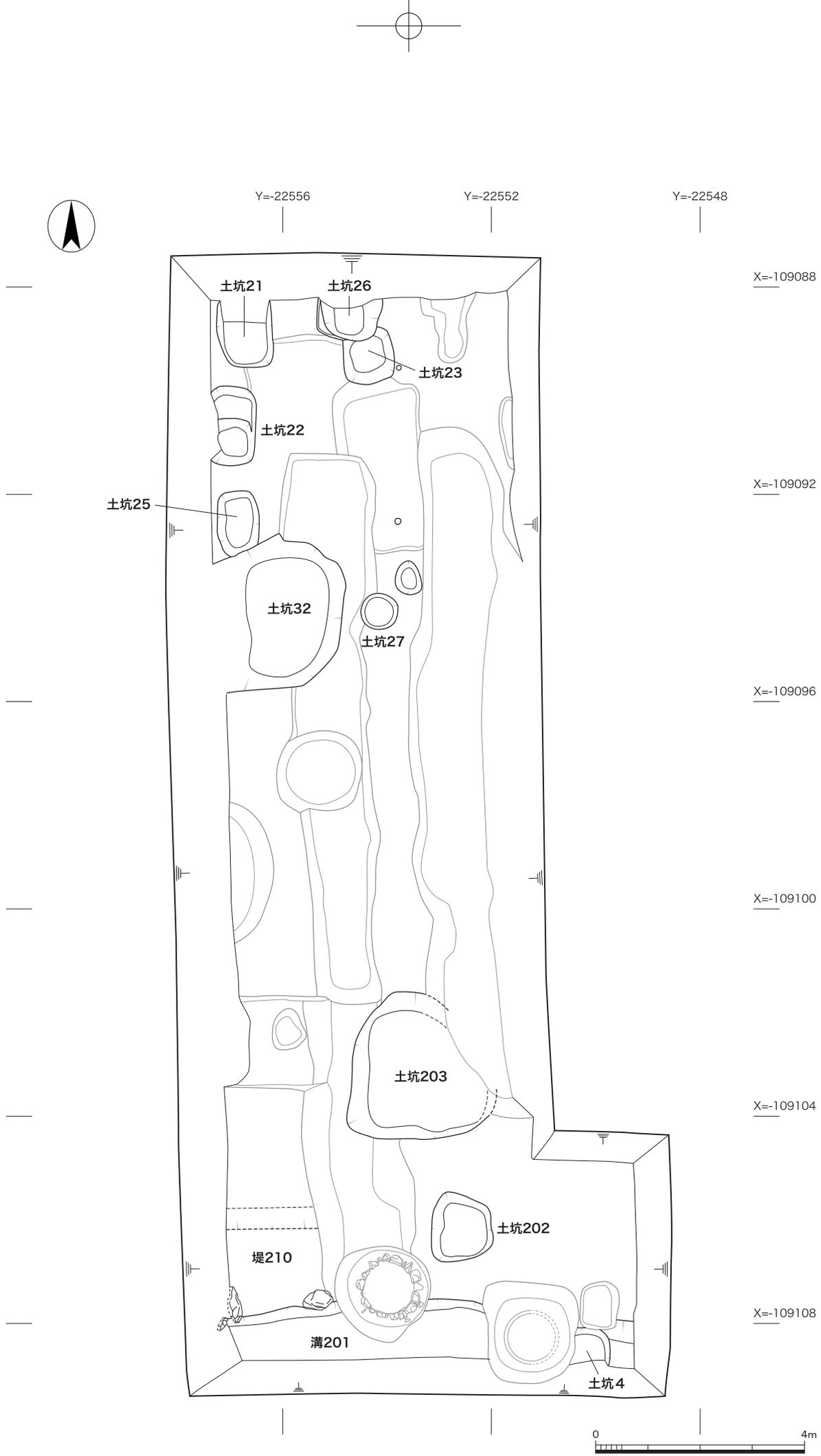


图6 第2面平面图(1:100)

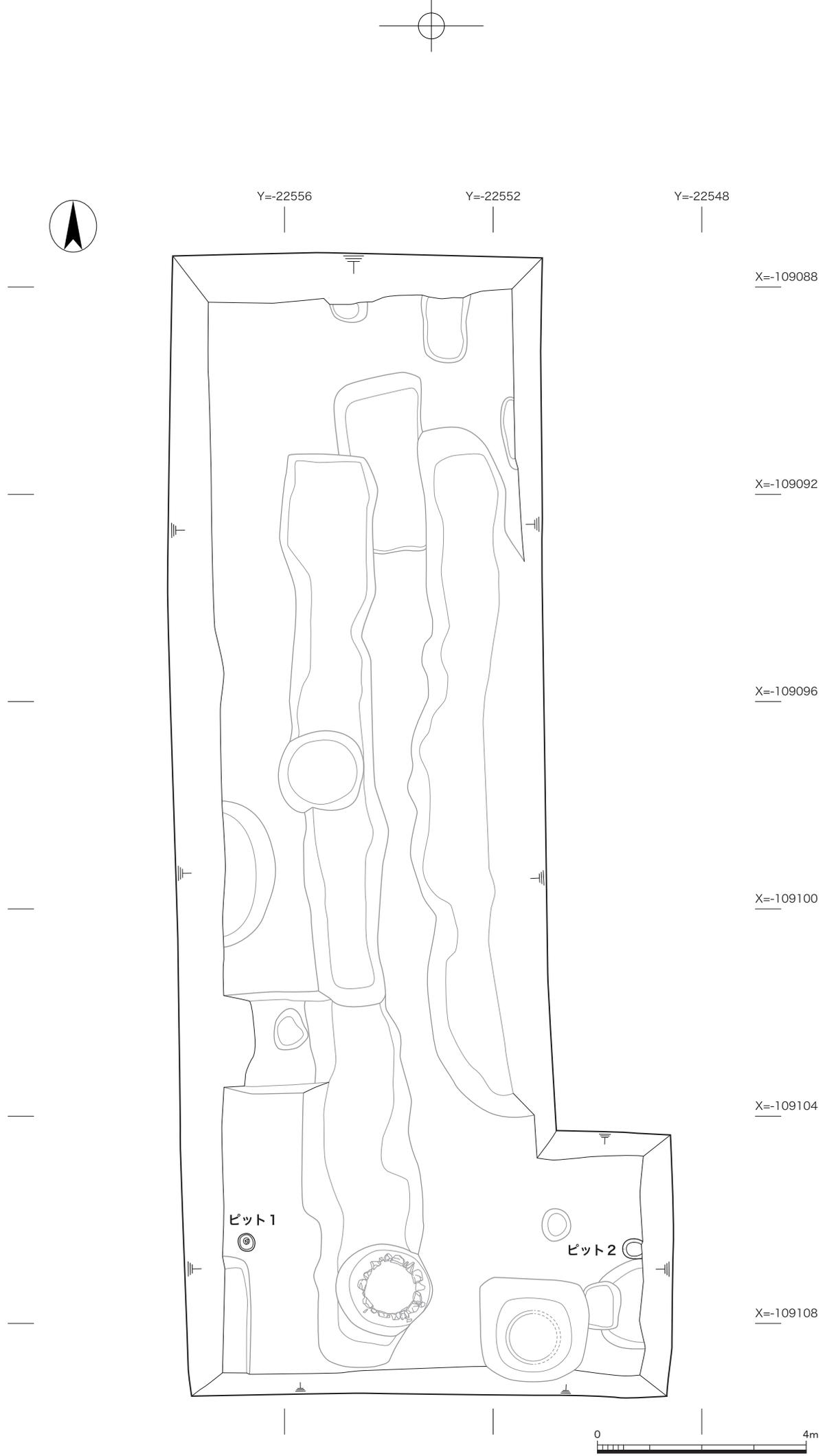


図7 第1面平面図(1:100)

2. 第3面の遺構 (図5・8、図版1)

第3面では、調査区の西部で中世の土坑、調査区の北部で平安時代の池跡、調査区の南部で平安時代の大炊御門大路と北築地関連の遺構を検出した。

築地 301 (図8、図版4・5) 調査区の南部で検出した大炊御門大路の北築地である。築地は基底部を検出したが地山である黄褐色粘質土を削り残して整形されていた。基底部の幅は1.9 m、頂部の幅0.4 m、残存高0.3 mで、断面は台形状を呈する。東西4.5 m分を検出した。築地の上部や側面の一部に積土とみられる土層が認められるが、上部構造は不明である。

溝 302 築地 301 の南側に沿って検出した溝で、大炊御門大路の北側溝と推定される。素掘りで幅1.0 m・深さ0.1 m、東壁から調査区の中央にかけて長さ4.5 m分を検出したが、西壁断

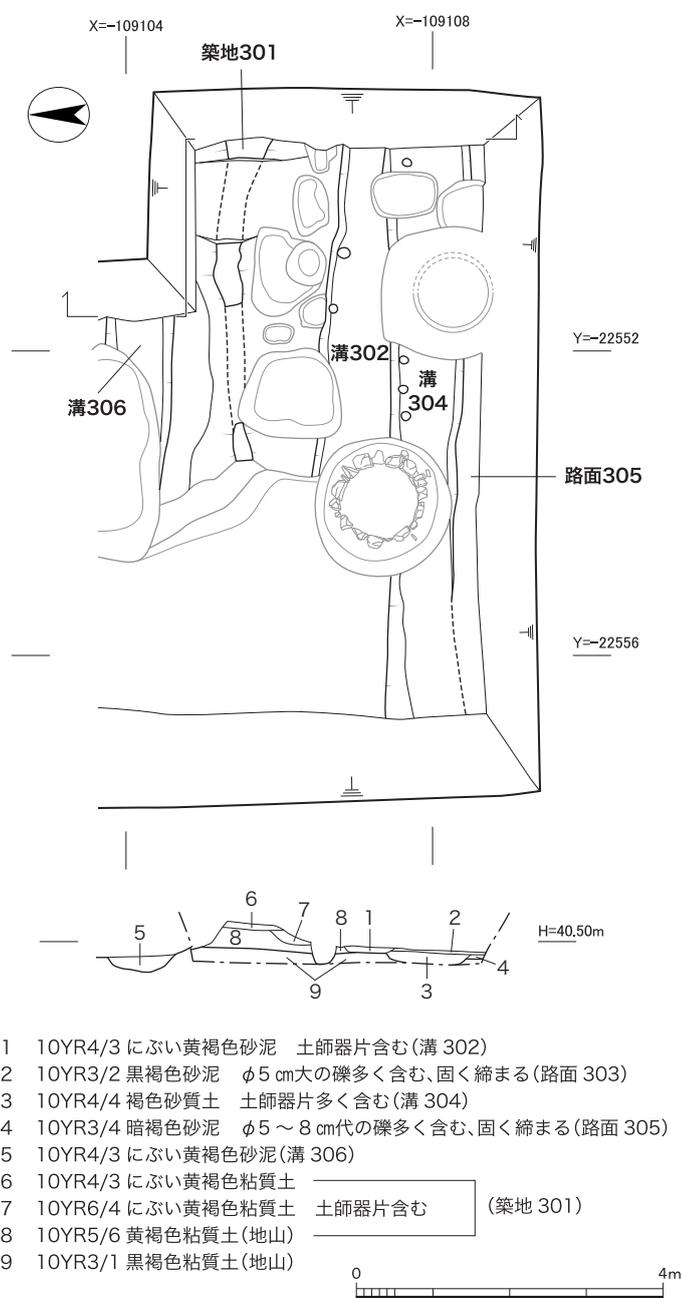


図8 大炊御門大路関連遺構実測図(1:100)

面にも一部が残っていることが確認できた。埋土はにぶい黄褐色粘質土(10YR4/3)で土器片を含んでいる。ここからは平安時代中期、3B段階の遺物が出土している。

路面 303 大炊御門大路の路面で溝 302 に伴うものである。幅 1.1 m 分を検出した。路盤の厚さは 0.05 m で径 0.05 m の礫を多く含み、表面は平滑で堅く締まっている。記録の関係で平面図には記載できていないが、東・南壁断面に断面状況を記載している。

溝 304 築地 301 の南側で検出した大炊御門大路の北側溝である。幅 0.9 m 深さ 0.15 m で、東西 7.5 m 分を検出した。溝の北肩部に径 0.1 m の杭跡が 4 ヶ所、内 3 ヶ所が 0.35 ~ 0.4 m 間隔で並んでおり、護岸の杭跡と考えられる。南肩部には認められない。埋土は褐色砂質土(10YR4/4)で土器片を多く含んでいる。ここからは平安時代前期、1B ~ C 段階の遺物が出土している。

路面 305 大炊御門大路の路面で溝 304 に伴うものである。幅 0.2 m 分を検出した。路盤の厚さは 0.05 m で径 0.05 m の礫を多く含み、表面は平滑で堅く締まっている。

溝 306 築地 301 の北側に沿って検出した溝で、十町側の内溝と推定される。溝は素掘りで幅 0.9 m、深さ 0.2 m で長さ 2.3 m 分を確認した。埋土はにぶい黄褐色砂泥(10YR4/3)である。土器片が少量出土している。遺物がわずかしこ出土していないため時期は不明であるが、築地の

裾に沿って掘削されている状況から溝 302 と対応したものと推定される。

池 307 (図 9、図版 6) 調査区の北部で検出した池状遺構である。池の南岸をほぼ東西に検出し、北側に向かって深くなる。最大の深さは肩口から 0.4 m である。汀には州浜や景石は認められなかった。埋土はにぶい黄褐色粘質土(10YR4/3)に暗褐色砂泥(7.5YR3/3)のブロック混じる土で一気に埋め戻されている。ここからは平安時代前・中期の遺物が多く出土しているが鎌倉時代、6B 段階の遺物が出土しており、埋め戻されたのはこの時期である。池自体の堆積層は底部にわずかに砂層が薄く堆積しているが時期は不明である。

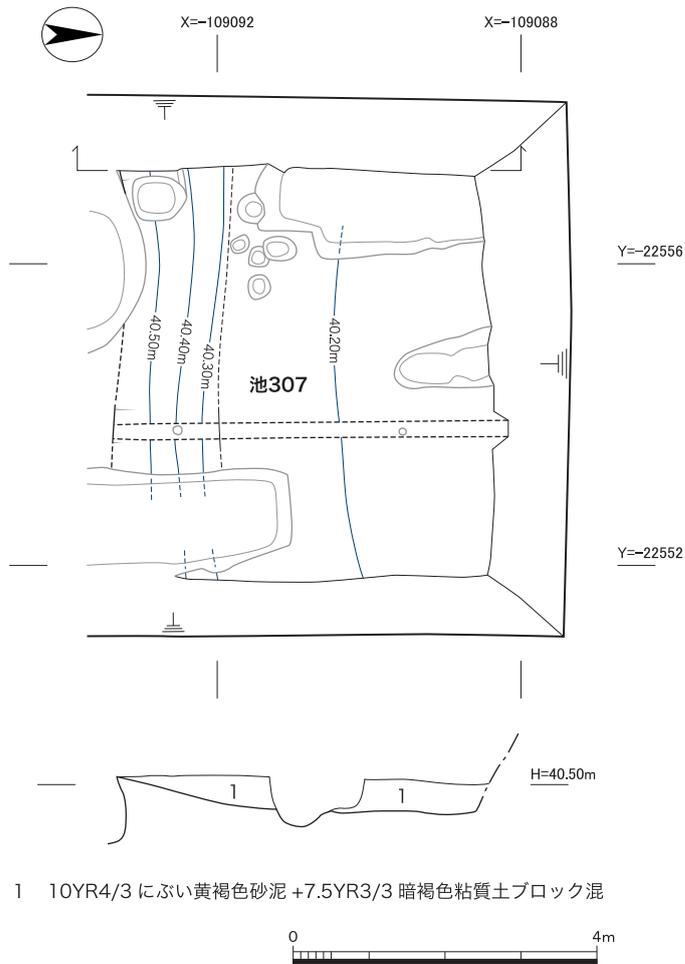


図 9 池 307 実測図(1 : 100)

区の西部で検出した大型の土坑（土坑 211）とそれを埋め戻す際に築かれた堤（堤 210）である。土坑 211 は深さ 0.3 m、東西 3.0 m 以上、南北 14 m で、さらに調査区の西側に延長する。土坑の底部は基本層序で述べた如く、本来の地山である黄褐色粘質土（10YR5/6）、黒褐色粘質土（10YR3/1）が採掘され、その下の礫を多く含む褐色粘質土（10YR4/4）となっている。このことからこの遺構は土採りを目的とした土坑と考えられる。ところがこの土坑の特殊な点は、埋め戻しの際に南側に堤 210 を構築し、それを南限として埋め戻されている点である。堤 210 は基点部の幅 3.0 m、頂部の幅 1.5 m、高さ 0.5 m、東西の長さ 2.2 m 以上である。花崗岩製の大型礎石 2 基（礎石 1・2）を転用して核として用い、礫を多く含んだ土を盛り上げて構築している。頂部の高さは築地 301 とほぼ同じで、第 2 層の上面とも同じである。このことから土坑 211、堤 210、第 2 層の整地はほぼ一連の作業と推定される。さらにいえば池 307 の埋め戻しも同じと考えられる。

なお、平面図での表現上、土坑 211 は第 3 面、堤 210 は第 2 面に記載している。

3. 第 2 面の遺構（図 6、図版 9 - 1）

第 2 面では調査区南部で鎌倉時代の大炊御門大路の北側溝、調査区の北部では近世初頭の土坑群を検出している。土坑群はほぼ同規模のものが一定間隔に並んでいるように見える。北部で検出した土坑群に関しては主なものだけを記す。

溝 201（図 10、図版 8） 調査区の南端で検出した東西方向の溝で、大炊御門大路の北側溝と考えられる。幅 1.1 m 以上、深さ 0.4 m、東西 7.9 m 分を確認し、調査区外の南、東西に延長する。埋土は暗褐色系の砂泥（10YR3/3 ~ 3/4）層で、礫多い部分や土師器片が多く含まれている部分がある。調査区の西側では堤 210 が北肩となっている。埋土からは鎌倉時代 6B ~ C 段階の

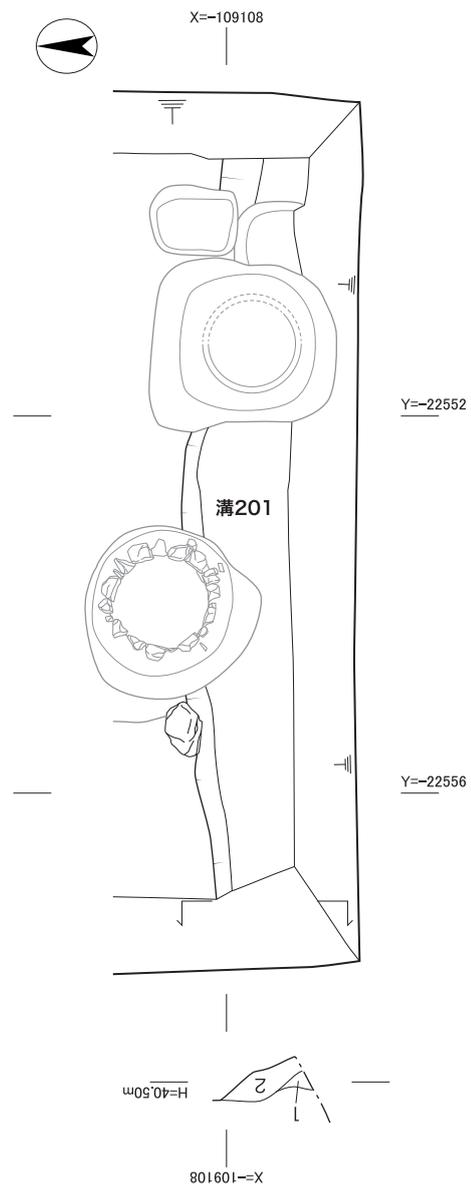


図 10 溝 201 実測図(1:80)

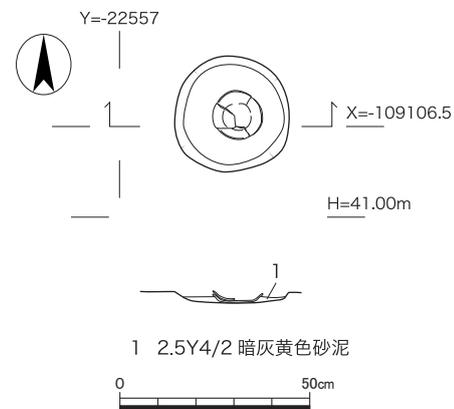


図 11 ビット 1 実測図(1:20)

土器が出土している。

土坑 202 調査区の南側で検出した土坑で、径 1.3 m、深さ 0.65 m である。築地 301 基底部にある粘質土を狙って掘削した土坑で、底部は礫の多い地山で止まり、側面は黄褐色粘質土を袋状に掘り採っている。室町時代のものと推測される。

土坑 203 調査区の南部で検出した土坑で、径 3.0 m、深さ 0.6 m である。この土坑も土採り土坑と考えられ、底部は礫の多い地山で止まっている。埋土からは鎌倉時代から室町時代の遺物が出土しており、鎌倉時代の土器には地方産の土師器が認められる。

土坑 21 (図版 9 - 3) 調査区の北端で検出した土坑で、幅 1.05 m、長さ 1.3 m 以上、深さ 0.7 m で、北側に延長する。埋土からは江戸時代初期の国産施釉陶器(美濃、唐津)が多く出土している。

土坑 22 (図版 9 - 4) 調査区の北西部で検出した土坑で、幅 0.8 m 以上、長さ 1.55 m、深さ 0.9 m で底部は北側が高く南側が深い 2 段落ちとなる。

土坑 23 (図版 9 - 5) 調査区の北部で検出した土坑で一辺 1 m、深さ 0.3 m の方形の土坑である。埋土からは江戸時代の国産施釉陶器(美濃)が出土している。

土坑 32 (図版 9 - 2) 調査区の北西部で検出した土坑で、南北 3.0 m、東西 2.5 m 以上、深さ 1.1 m、調査区に西側へ延長する。土採り土坑と考えられ、底部は砂礫の多い地山で止まり、側面は地山の黄褐色、黒褐色の粘質土層をえぐり込むように掘削している。

4. 第 1 面の遺構 (図 7、図版 10)

第 1 面の多くの分部は、近・現代の井戸や廃棄土坑によって壊されており、遺構はピットをごく少数検出したに過ぎない。

ピット 1 (図 11) 調査区の南西部で検出したピットである。直径 0.3m、深さ 0.05 m、皿状を呈する。中央に土師器の皿 2 枚を重ねて納めている。何らかの祭祀に伴う遺構と考えられる。

第IV章 遺物

今回の調査では平安時代から江戸時代に至る各時代の遺物が出土した。土器・瓦類が大半で、銭貨、礎石もある。時代では平安時代のもが多く、江戸時代が次いで多い、室町時代のは意外に少ない。平安時代の土器・瓦類の多くは鎌倉時代の整地層と考えられる第2層からの出土で、平安時代前期から中期のもが大半である。江戸時代のもは第2面で検出した土坑群からのもので国産陶器の優品が出土している。

1. 土器類 (図 11・図版 11～13)

土器類に土師器・須恵器・緑釉陶器・施釉陶器・焼締陶器・青白磁などがあり、平安時代から江戸時代のもがある。以下、遺構ごとに詳細を述べる。

溝 304 出土土器 1は土師器皿 A、2は杯 A である。共に外面はケズリ、内面はナデである。平安時代前期 1B～C 段階、3は須恵器蓋である。上面中央に宝珠型のつまみがある。

溝 302 出土土器 4・5は土師器皿 A である。口縁端部はいわゆる「て」の字形に屈曲する。平安時代中期 3B 段階。

土坑 26 出土土器 6・7は小型と大型の皿 N である。口縁部外面には二段ナデが認められる。鎌倉時代 6A～B 段階。

表4 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	A ランク点数	B ランク箱数	C ランク箱数
奈良時代	瓦		軒丸瓦 1 点、軒平瓦 1 点		
平安時代	土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、青磁、白磁、瓦類、土製品、銭貨		土師器 2 点、須恵器 1 点、緑釉陶器 1 点、土馬 3 点、軒平瓦 7 点、銭貨 5 点、礎石 2 点		
鎌倉時代	土師器、中世須恵器、青磁、白磁、瓦類		土師器 18 点、軒丸瓦 1 点、軒平瓦 2 点		
室町時代	土師器、焼締陶器、青磁、銭貨		銭貨 3 点		
江戸時代	土師器、焼締陶器、施釉陶器、染付磁器		土師器 6 点、焼締陶器 1 点、施釉陶器 9 点		
不明	銭貨		銭貨 2 点		
合計		19 箱	65 点 (4 箱)	0 箱	15 箱

※礎石を箱に換算、A ランクを選出したため当初より箱数が増加している。

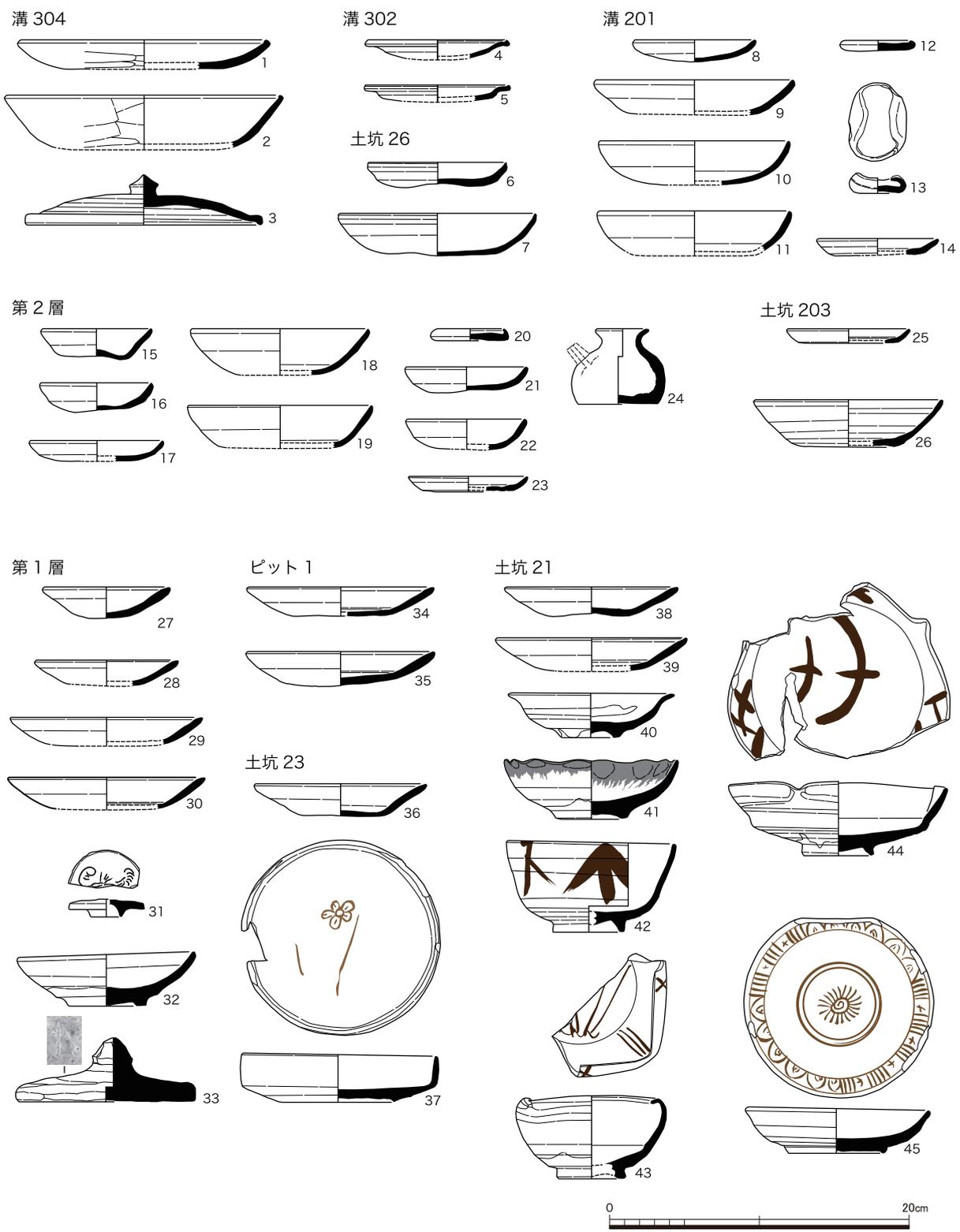


図 12 出土土器実測図(1:4)

表5 土器計測表

No.	種類	器形	口径	器高	色調	出土遺構	備考
1	土師器	皿 A	16.8	2.0	7.5YR7/4	溝 304	
2	土師器	杯 A	18.6	3.6 残	7.5YR6/2	溝 304	
3	須恵器	蓋	15.9	3.4	N6/0	溝 304	
4	土師器	皿 A	9.6	1.3 残	7.5YR7/3	溝 302	
5	土師器	皿 A	9.8	1.0 残	10YR8/2	溝 302	
6	土師器	皿 N	9.3	1.7	7.5YR8/2	土坑 26	
7	土師器	皿 N	13.2	2.9	10YR8/2	土坑 26	
8	土師器	皿 Ss	8.2	1.5	2.5Y8/1	溝 201	
9	土師器	皿 N	13.4	2.4	7.5YR7/3	溝 201	
10	土師器	皿 S	12.8	3.0	2.5Y8/2	溝 201	
11	土師器	皿 S	13.0	2.7 残	2.5Y8/2	溝 201	
12	土師器	皿 Sc	5.1	0.7	10YR8/2	溝 201	
13	土師器	耳皿	5.0	1.4	7.5YR8/3	溝 201	
14	土師器	皿 X	8.1	1.2	5YR7/4	溝 201	
15	土師器	皿 S	7.4	2.1	10YR8/2	第 2 層	
16	土師器	皿 S	7.6	2.0	2.5Y7/2 ~ 8/2	第 2 層	
17	土師器	皿 Ss	9.0	1.4	10YR8/2	第 2 層	
18	土師器	皿 S	12.0	3.1	2.5Y8/1	第 2 層	
19	土師器	皿 S	12.4	2.9	10YR8/1	第 2 層	
20	土師器	皿 Sc	5.2	0.8	7.5YR8/2	第 2 層	
21	土師器	皿 N	8.2	1.8	2.5Y7/2	第 2 層	
22	土師器	皿 Nd	8.1	2.1	10YR8/3	第 2 層	
23	土師器	皿 X	8.0	1.0	5YR7/5	第 2 層	
24	緑釉陶器	水滴	3.6	5.1	2.5GY7/8	第 2 層	
25	土師器	皿 X	8.2	1.0	5YR7/4	土坑 203	
26	土師器	杯 X	12.6	3.2	10YR8/3	土坑 203	
27	土師器	皿 Sb	8.5	2.1	7.5YR7/6	第 1 層	
28	土師器	皿 Sb	9.6	1.8	10YR8/2	第 1 層	
29	土師器	皿 S	12.8	1.9	7.5YR7/4	第 1 層	
30	土師器	皿 S	13.2	2.2	10YR7/3	第 1 層	
31	青白磁	蓋	5.4	1.2	10Y7/1	第 1 層	
32	唐津	灰釉皿	12.0	3.7	7.5Y7/1 ~ 7/2	第 1 層	
33	信楽	水指蓋	12.0	4.3	5YR4/6	第 1 層	
34	土師器	皿 S	12.5	2.3	10YR7/2	ピット 1	
35	土師器	皿 S	12.6	2.0	10YR8/2	ピット 1	
36	土師器	皿 S	11.5	2.2	7.5YR7/3	土坑 23	
37	美濃	志野皿	13.1	3.3	2.5Y8/1	土坑 23	
38	土師器	皿 S	12.6	2.0	2.5Y7/2	土坑 21	
39	土師器	皿 S	12.8	2.3	7.5YR7/2 ~ 8/2	土坑 21	
40	唐津	灰釉皿	11.1	3.0	10YR6/3	土坑 21	
41	唐津	朝鮮唐津皿	11.6	4.0	5BG8/1・5Y3/1	土坑 21	
42	唐津	絵唐津椀	11.3	6.1	2.5Y6/1	土坑 21	
43	唐津	絵唐津鉢	10.0	5.6	10YR7/3	土坑 21	
44	唐津	絵唐津皿	14.5	5.0	7.5Y6/1	土坑 21	
45	美濃	長石釉鉄絵皿	12.4	3.1	10YR8/2	土坑 21	

溝 201 出土土器 8 は小型の皿 SS、9 は皿 N、10・11 は皿 S である。一段ナデとなっている。12 はコースター形の皿 Sc、13 は耳皿で共に小型である。これらは鎌倉時代 6B～C 段階。14 は皿 X、地方の製品でロクロ製である。

第 2 層出土土器 15・16 は小型の皿 S、17 は皿 SS、18・19 は大型の皿 S である。20 はコースター形の皿 Sc である。21 は小型の皿 N、22 は皿 Nd である。これらは鎌倉時代 6B 段階。23 は皿 X、地方の製品でロクロ製である。また、24 は混入品の緑釉水滴で、濃い緑色の釉薬が底部まで全面に施されている。平安時代中期 10 世紀後半のものと考えられる。

土坑 203 出土土器 25 は皿 X、26 は杯 X、ともに地方産のロクロ製土師器である。

第 1 層出土土器 27・28 は小型の皿 Sb、29・30 は大型の皿 S である。江戸時代 11C 段階。31 は青白磁で壺の蓋と推定される。32 は唐津の灰釉皿で底部に削り出しの高台が付く。33 は信楽の水指の蓋である。上部に摘みが付き、上面に「V」形のへら書きが認められる。

ピット 1 出土土器 33・34 は土師器皿 S である。よく似た仕上げとなっている。江戸時代 11B 段階。

土坑 23 出土土器 36 は土師器皿 S、37 は美濃の志野皿で、内面に花文が描かれている。江戸時代 11B 段階。

土坑 21 出土土器 38・39 は土師器の皿 S である。40～44 は唐津の製品である。40 は灰釉皿で口縁部から体部にかけて灰釉が施されている。41 はいわゆる朝鮮唐津の皿で波状口縁をなし、口縁部には黒褐色、体部には青みがかかった灰釉が施されている。42 は絵唐津の椀で体部外面に笹葉の鉄絵が描かれている。43 は絵唐津の鉢で、口縁部を方形に整形し、内面には鉄絵が施されている。44 は絵唐津の皿で、口縁部を外方向に摘み出して（おそらく 3ヶ所）整形している。内面には鉄絵が施されている。45 は美濃の長石釉鉄絵皿で口縁部内面に鉄絵の幾何学文様帯を設け、内面底部に文様を施している。江戸時代 11B 段階。

2. 土製品（図版 11 - 2）

土製品としては土馬がある。平安時代前期の大炊御門大路北側溝（溝 304）から 3 点（土馬 1～3）出土しており、いずれも体部で頭・脚・尾は欠損しており、摩滅が著しい。

3. 瓦（図 12、図版 14）

瓦は奈良時代から鎌倉時代の丸・平瓦が第 2 層などの包含層から出土しているが多くは小片である。軒瓦は奈良時代から鎌倉時代の軒丸・軒平瓦が出土しているが少数である。

瓦 1 は忍冬唐草文軒平瓦、上面の外区には珠文が並び、下面の外区には鋸歯文が並ぶ。平城 6647 型式の唐草文を上下逆にしたモチーフか（註 1）。幅の広い顎が付く。瓦 2 は複弁八弁軒丸瓦、珠文は 1 + 6、圏線で区切られた外区には珠文が並び、外縁には鋸歯文が並ぶ。平城 6285A 型式。瓦 3～5 は平安時代の唐草文軒平瓦で、巻きの強い唐草が巡り、外区には珠文が配される。いず

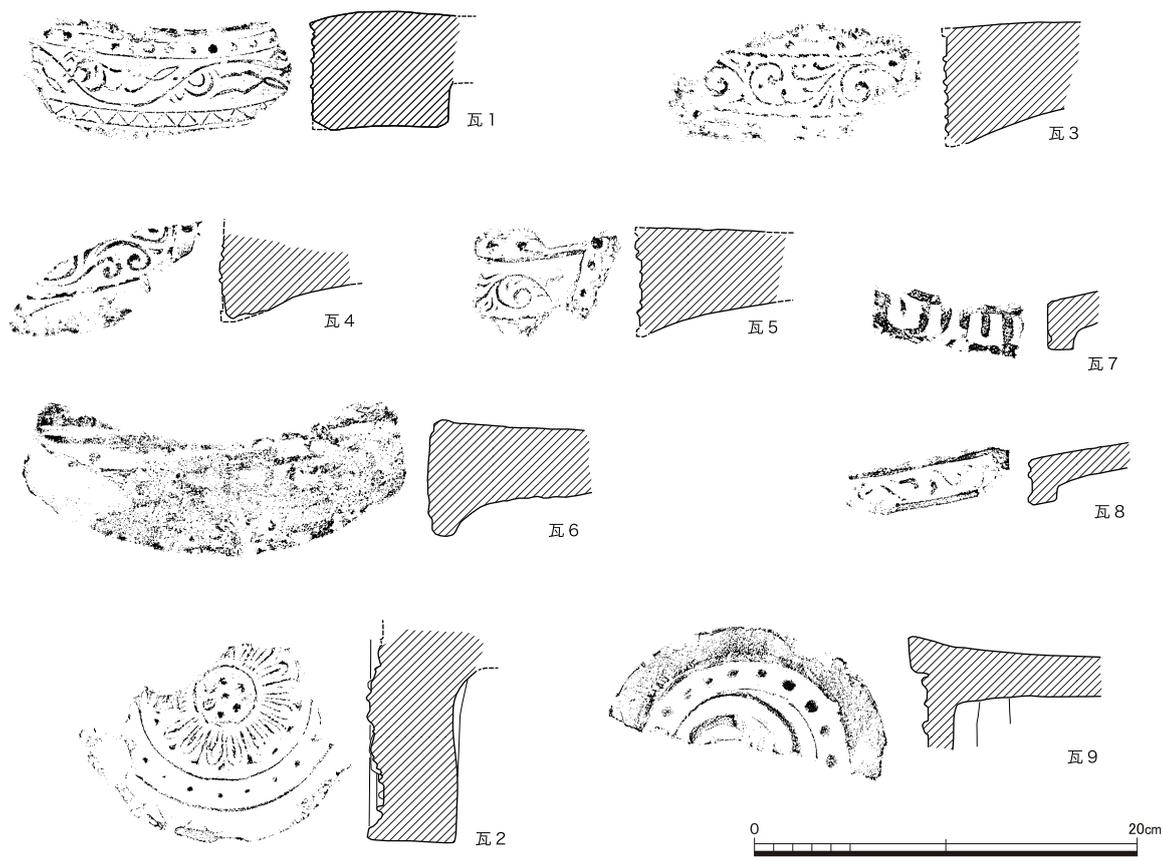


図13 出土瓦拓影・実測図(1:4)

れも曲線顎。この内、瓦3は『平安京古瓦図録』308・309・310と同範(註2)。瓦6は笠ずれを起こし文様は不明、かろうじて上面の外区に珠文が配されているのがわかる。瓦7は小型の剣頭文軒軒平瓦で形骸化した剣頭文が配されている。瓦8は小型の唐草文軒平瓦で、形骸化した唐草文が巡る。いずれも鎌倉時代。瓦9は巴文軒丸瓦で巴文は右巻き、巴の尾部は互いに接して圏線をなす。外区には珠文が配されている。鎌倉時代。

註1 『平城宮発掘調査報告 XIII(図版)』奈良国立文化財研究所学報 第50冊 奈良国立文化財研究所 1991年

註2 『平安京古瓦図録』平安博物館編 雄山閣出版 1991年

4. 銭貨(表6、図版15-1)

銭貨は12点が出土している。多くは重機掘削中や第1層の掘下げ中に見つかったもので遺構に伴うものは少ない。銭名がわかるものが10点あり、内7点は北宋銭で「元豊通宝」が3点と最も多い。明銭は「洪武通宝」と「永楽通宝」の2点、安南銭は「招平通宝」の1点がある。

5. 礎石(図16・図版15)

花崗岩製の大型礎石が2基出土している。堤211を構築する際の核として転用されていたもの

表6 錢貨表

No.	錢名	生産地	初鑄	特徴	径 (mm)	重量 (g)	出土遺構
1	至道元宝	北宋	995		23	2.6	重機掘削中・第1面検出中
2	祥符通宝	北宋	1009		25	3.4	重機掘削中・第1面検出中
3	天聖元宝?	北宋	1025	左半欠損	不明	※1.6	重機掘削中・第1面検出中
4	元豊通宝	北宋	1078		25	3.2	第1層
5	元豊通宝	北宋	1078		25	3.5	重機掘削中・第1面検出中
6	元豊通宝?	北宋	1078		24	3.5	第1層
7	元祐通宝	北宋	1086		25	2.7	重機掘削中・第1面検出中
8	洪武通宝	明	1368	裏面に「一銭」銘あり	23	3.5	重機掘削中・第1面検出中
9	永楽通宝	明	1411	上半一部欠損	24.5	※2.3	土坑 203
10	招平通宝	安南	1434		24	4.5	攪乱
11	不明			左半一部欠損	25	※1.9	重機掘削中・第1面検出中
12	不明				不明	2.0	第3面掘下

である。なお、同様のものが2基 2005年度調査(調査9)で池の埋土から出土している。

礎石1 縦56cm、横75cm、高さ34cm、花崗岩の自然石の上面を平らに加工し、直径54cm、高さ5cm、円形の柱座を彫りだしている。柱座の中央には直径19cm、深さ8cmの臍穴を穿っている。上面の仕上げは丁寧で平滑である。両側面には上方から打ち欠いたと思われる鑿跡が数か所認められ、側面の形を整えたものと考えられる。重さ約200kgである。

礎石2 縦73cm、横71cm、高さ45cm、花崗岩の自然石の上面を平らに加工し、その中央に直径19cm、深さ9cmの臍穴を穿っている。上面の仕上げは丁寧で平滑である。柱座はない。重さ約280kgである。

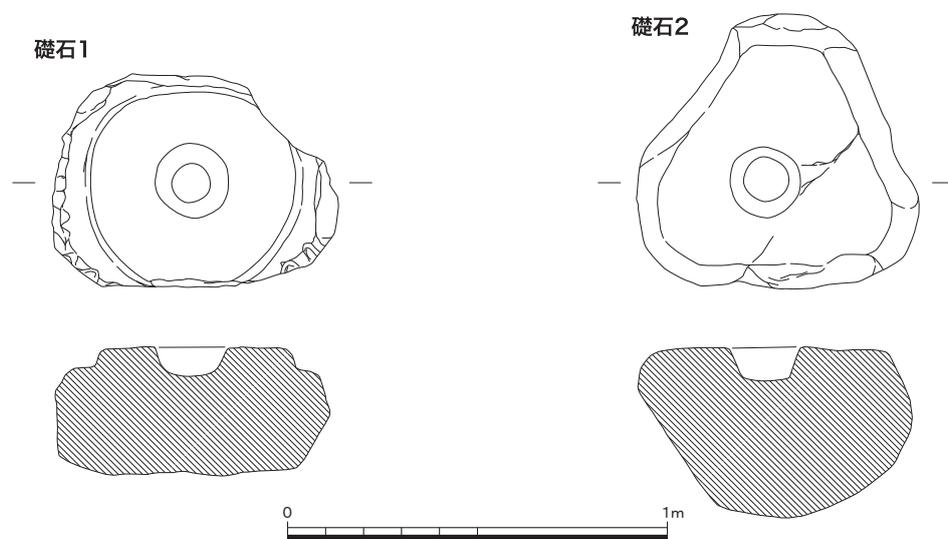


図14 礎石実測図(1:20)

第V章 まとめ

調査では平安時代から江戸時代までの遺構を3面にわたって調査し、それぞれの時代の遺構を確認した。以下時代順にその経過を述べる。

二条城北遺跡 今回の調査では二条城北遺跡に関する遺構・遺物は全く確認できなかった。ところで既往の調査でふれたが、これまでの高陽院跡の調査では縄文時代から弥生時代の流路が何か所かで確認されている。その多くは高陽院の園池と旧流路が重複して検出されている。園池はこうした旧流路跡を利用して構築し、その伏流水を水源の一部として利用していたと推測される。裏を返せば園池の位置は旧流路に規制されていたのではないだろうか。

条坊関連遺構について 調査では平安時代の犬走御門大路路面と北側溝、北築地、十町側の内溝を検出した。路面と北側溝は前期と中期の2時期のものが確認できた。遺構の状況と出土遺物から平安時代前期は、路面305、溝304(北側溝)、築地301で構成されており、中期は路面303、溝302(北側溝)、築地301、溝306(内溝)へと変遷したと考えられる。

この内、溝304からは9世紀初頭の遺物が出土しており、前期の遺構群は平安京造営当初のものと考えられよう。この前期の遺構群を平安京の復元モデル(註1)と比較すると、築地301の中心座標は(Y-22,552・X-109,105.55)、復元モデルで同じY座標値におけるX座標値は(X-109,106.17)である。その差は0.62mで、実際の遺構は南へ0.62mずれて検出されたことになる。築地の幅が1.9mあることからまさに誤差の範囲で、築地はほぼ正確な位置に施工されていることがわかる。

次に、延喜式(註2)に記された条坊の規定と実際の遺構の規模を比較してみよう。犬走御門大路は(大路広十丈)であるので、築地基底部幅6尺(約1.8m)、犬走幅5尺(約1.5m)、側溝幅4尺(約1.2m)である。検出した遺構では築地(築地301)の幅約1.9m、犬走1.0m、側溝(溝304)0.9mである。犬走と側溝の幅が若干狭いが、これも大きな誤差ではない。当地の犬走御門大路は平安京の計画通りに施工されていたとみてよからう。

条坊関連の遺構は西隣りの(9次調査)でも検出されており、今回の調査とほぼ同じ状況である。犬走御門大路の北側は平安時代の遺構の残存状況が良いことがわかる(図2)。

高陽院の園池について 高陽院に関する遺構としては、調査区の北部で検出された池307がある。高陽院南部に広がる広大な園池の一部と考えられるが、汀には州浜や景石が据えられた痕跡は認められなかった。西隣の調査(9次調査)では北東に延びる洲浜が4時期にわたって検出されている。その中で初期に東にのびる汀が表現されている。この汀の延長方向が今回の池の南岸と一致することから、高陽院の園池南岸は9次調査からほぼ東西方向に延びていく時期があったと考えられる。今回、池自体の堆積層がほとんど認められなかったので池の水位は明らかではないが、汀の傾斜の状況から標高40.5m前後と推測される。

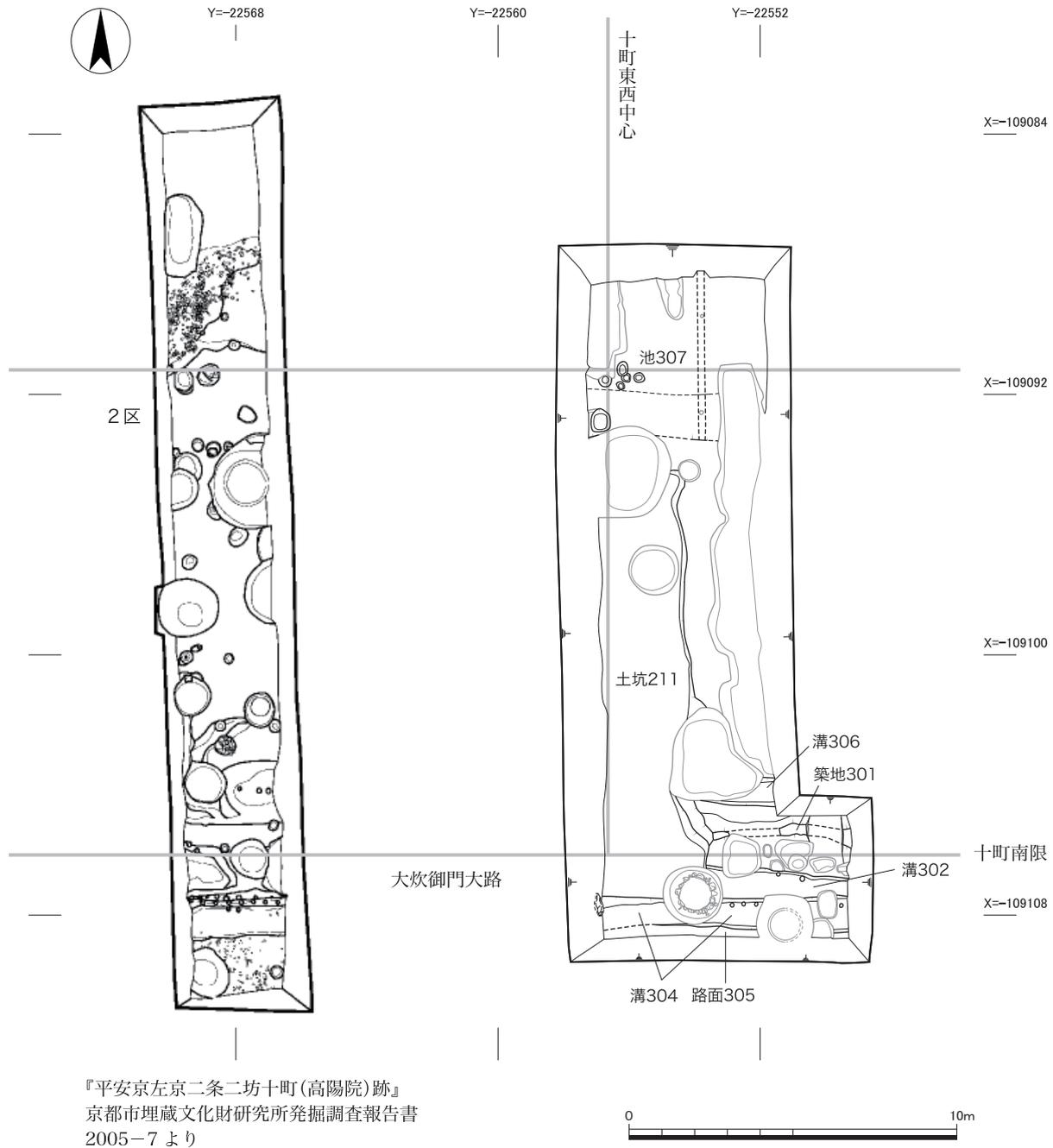


図 15 近隣調査遺構配置図(1 : 200)

大型礎石について 堤 210 からは花崗岩製の大型礎石が転用されて 2 基出土している。そのうちの一基は径 50cm を超える柱座を有している。同様な礎石が 2005 年度調査 (9 次調査) でも 2 基、元位置を保たず園池の埋土から発見されている。今回のものを合わせて 4 基発見されたことは、近隣に礎石建ちの大型建物が存在していたことを示すものと考えられる。高陽院内では宅地の北西部で平成 9 年度に実施された (8 次調査) で建物礎石の一部が検出されており、宅地の

北部に建物群、南部には園池が広がっていたと推測されている。しかしながら今回の礎石の発見によって、高陽院内部の宅地構成を再考する必要がある。

土坑 211、堤 210 と第 2 層について 今回の調査で、最も注目すべきは土坑 211、堤 210 と第 2 層の関係、その時期と目的である。遺構の章で述べた通り、土坑 211 は地山の粘質土を採取したと想定される大規模な土坑で、それを埋め戻す際に大炊御門大路側に堤 211 を設け内側を埋め戻している(第 2 層下層)。この堤 211 は残存する築地 301 に高さに合わせてあり、十町側は土坑 211 の範囲を超えて、第 2 層によってすべてこの高さに埋め戻されている。高陽院の園池と推定される池 307 も同時に埋め戻されている。この第 2 層からは鎌倉時代の(6B)段階の遺物が出土しており、その時期は 13 世紀初めごろと推定される。このころ高陽院に起こった事象としては、元久二年(1205)に後鳥羽上皇が院の御所を東側二町(十五・十六町)に再建し、西側二町(九・十町)は埋め戻されたことがある。もう一つは後鳥羽上皇が承久の変に敗れて配流され、後高倉法皇の院御所となっていた高陽院が貞応二年(1223)の焼失以降再建されなかったの 2 点がある。遺構の状況から言えば、後鳥羽上皇の院御所に伴って西側が放棄された際とみられるが、土器の年代観からは貞応二年の焼失に伴う整理とも考えられ、現段階では判断がつかない。

また、第 2 面の上面では大炊御門大路の側溝(201)は検出できたものの、十町側には築地や塀などの遮蔽物はなく、鎌倉から室町時代の遺構密度も低い、中世における高陽院跡地の利用は低調だったと推測される。

第 2 面の土坑群について 当地においては江戸時代前期がもう一つの画期である。調査区に北側一帯には土坑群が形成される。これらの土坑からは江戸時代前期の唐津、美濃といった産地の施釉陶器が多く出土している。これらは桃山時代から江戸時代前期にかけて流行する「茶陶」と呼ばれる国産施釉陶器で、こうした陶器を所有できる富裕層が当地にいたことがわかる。江戸時代前期の絵図『寛永後萬治前洛中絵図』(註 3)には平安京の十町域を踏襲した街区の中央部に「小野宗左衛門」と墨書された屋敷地が記されている。この

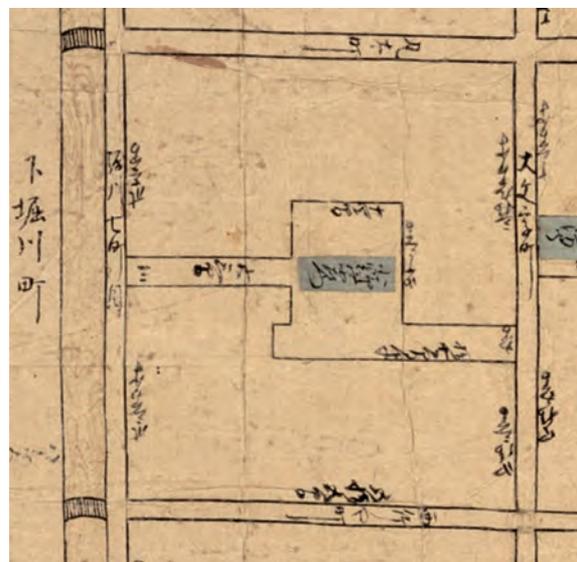


図 16 寛永後萬治前洛中絵図

小野宗左衛門は江戸時代前期の武士で徳川家康に仕え、元和元年(1615)には大津代官となり、大津のみならず畿内各地の幕府領の支配を担当していた人物である(註 4)。寛永十七年(1640)に死去しており、承応三年(1654)に描かれた『新版平安城東西南北町并洛外之図』には屋敷地が描かれておらず、宗左衛門の死去に伴って屋敷も廃絶されたものと考えられる。この屋敷廃絶

時期と廃棄された陶器の年代がほぼ一致していることから、調査区北部で検出された土坑群は小野屋敷と関連があるものと推測できる。

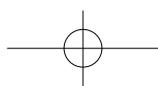
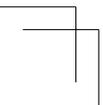
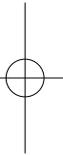
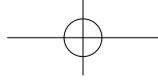
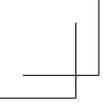
註1 『平安京復元モデル』公益財団法人京都市埋蔵文化財研究が作成した平安京の復元モデルデータ。

註2 『延喜式』巻四十二「左右京職・京程」

註3 『寛永後萬治前洛中絵図』京都大学附属図書館所蔵(部分)』

註4 『デジタル版 日本人名大辞典+ Plus』より

图 版





1. 第3面オルソ画像（俯瞰）

図版2
遺構



1. 第2面オルソ画像（俯瞰）



1. 第1面オルソ画像（俯瞰）

図版4
遺構



1. 大炊御門大路北築地関連遺構（西から）



2. 大炊御門大路北築地関連遺構（南から）



1. 大炊御門大路北築地（築地301）（西から）



2. 大炊御門大路北築地断割断面（築地301）（西から）



1. 池307 (南から)



2. 池307 (西から)



1. 堤210〔礎石を用いた核〕（東から）



2. 土坑211完掘状況（北から）



1. 溝201 (西から)



2. 溝201断面 (東から)



1. 調査区北部土坑群（南から）



2. 土坑32（東から）



3. 土坑21（南から）



4. 土坑22（東から）



5. 土坑23（北から）



1. 1区第1面全景（南東から）



2. 1区第1面南部（北東から）



1. 溝304出土土器



2. 溝304出土土馬



3. 溝302出土土器



4. 第2層出土緑釉水滴



5. 第2層出土土器



1. 溝201出土土器



2. 第1層出土土器



図版14
遺物(瓦類)



瓦2



瓦9



瓦1



瓦5



瓦3



瓦4



瓦7



瓦8



瓦6



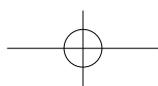
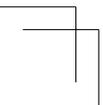
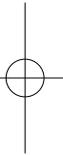
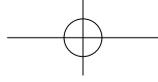
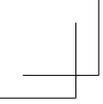
1. 銭貨



2. 礎石1



3. 礎石2



報告書抄録

ふりがな	へいあんきょうさきょうにじょうにぼうじゅつちょうあと・かやいんあと・にじょうじょうきたいせきはつちつちょうさほうこくしょ							
書籍	平安京左京二条二坊十町跡・高陽院跡・二条城北遺跡発掘調査報告書							
シリーズ名	特定非営利活動法人平安京調査会発掘調査報告書							
シリーズ番号	第4集							
編著者名	吉崎 伸							
編集機関	特定非営利活動法人平安京調査会							
所在地	〒603-8042 京都市北区上賀茂狭間町9番地3号							
発行所	特定非営利活動法人平安京調査会							
発行年月日	2024年9月30日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
平安京左京二条二坊十町跡・高陽院跡・二条城北遺跡	京都市中京区西竹屋町505番1・505番2・507番・509番地	26100	1 238 248	35度 00分 58秒	135度 45分 10秒	2024年 5月19日 ～ 2024年 6月26日	164 m ²	集合住宅 建設工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安京左京二条二坊十町跡・高陽院跡・二条城北遺跡	集落跡	平安時代	築地・路面・道路側溝・園池	土師器・須恵器・緑釉陶器・軒平瓦・礎石		平安時代の犬炊御門大路北築地を検出した。高陽院の園池を検出した。		
	都城跡	鎌倉時代	道路側溝	土師器・軒平瓦				
	邸宅跡	江戸時代	土坑	土師器・施釉陶器・焼締陶器				

平安京左京二条二坊十町跡・高陽院跡・ 二条城北遺跡発掘調査報告書

編集・発行 特定非営利活動法人平安京調査会
〒 603-8042 京都市北区上賀茂狭間町9番地3号
TEL 075-334-5680
<https://heiankyo-tyousakai.com>

コンピューター・システム株式会社
〒 602-8453 京都市上京区笹屋町4丁目273番3
TEL 075-462-5411
<http://www.comsys-kk.co.jp>

発行日 2024年9月30日

